



建築家・遠藤 新(えんどう あらた)

No.5 建築家の使命

■戦後の作品

昭和21年11月に帰国した遠藤は、心臓病のため入退院を繰り返した。遠藤新建築教室という名称で事務所を再開したが、再び遠藤新建築創作所に改めた。戦前に学校の校舎あるいは講堂を多数設計していた遠藤は、戦後の新制中学校の校舎の設計に対する提言をし、所員一丸となって既存の設計図の改良案を数十件作成したという。文部省の若い技官であった池田伝蔵は遠藤のもとを訪ね、指導を仰いだという。池田夫人によれば、その多くの図面は長く池田のもとにあったが、すべて廃棄され現存しない。しかしながら、遠藤の残した資料により、熊本の益城中学校や軽井沢など各地の校舎の改良案の概要を知ることができる。実際に遠藤が設計した秋田の十文字中学校、岩谷東光中学校、宮城の若柳中学校、新潟の長岡中学校などの校舎は竣工した。たとえば岩谷東光中学校の設計では緩勾配の片流れ屋根が用いられた。その設計理由は、屋根に積もった雪を一方から吹く地域特有の風が飛ばすことで、雪下ろしをせずに済むというものであったという。「地所が建築を教へて呉れる」という、地域の特徴から割り出した設計であった。因みに、昭和28年(1953年)に宮城県教育委員会により発行された『新しい学校建築』いちほさまには、一迫中学校、若柳中学校、田尻中学校が紹介されている。

遺作となった代表作の一つである目白ヶ丘教会(1950年)は、鉄筋コンクリートの大きなアーチの状の梁が架かるダイナミックな室内が特徴である。そして、外観を特徴づける鐘塔の曲線は、合板の上に遠藤自らが描いた原寸図に基づき施工されたと聞く。また、予算の関係で、当初木造平家で建てられた教育館は、2003年に遠藤の次男の楽(1927年～2003年)の設計で鉄筋コンクリート2階建てに建て替えられた。戦後60年を経た教会建築は、手入れと修理をしながら大切に使われている。また、同年に竣工した木造の飯能織維(後の平岡レース)事務所棟は2階建てで、地元^の西川材とプラスター、ソフトテックスなどを使用した瓦屋根の簡素な建築であったが、遠藤の設計に見られる平面計画・断面計画・構造計画などの要素が集約された、最後の作品の一つであった。市の所有になって幾年かを経た2011年に解体されて、主要部材の一部が保管されているという。そして同社食堂(1951年)は、遠藤の云う「三枚おろし」の建築で、戦後の明るさと希望を感じさせる軽やかな食事の場としての建築であったが、事務所棟に先立ち取り壊された。

■建築という環境 — 学校建築への最後の熱意

遠藤は「哲学なき教育と校舎——日本インテリへの反省(その二)」(『国民』1949年5月号)に学校建築への思いを吐露している。学校建築は「日本の将来を左右する大問題である」にもかかわらず省みられていない。病身にもかかわらず「東西に奔走し、進駐軍や議会やあらゆる機会に世間の注意を喚起させんとするのは蓋し止むに止まれぬ憂憤の結果である。そのために卅五年前の古証文迄持ち出して今更同じことをくり返さなければならないのは私にとって決して楽しい経験ではないのだ」と。

病床の遠藤とともに満州(中国東北三省)から帰国し、香川県財田に帰省した山崎忠夫(元満州中央銀行建築科)は、満州中央銀行関連の仕事で、遠藤の



目白ヶ丘教会



教会内1



教会内2



若柳中学校 屋内体操場

右腕として働いた人物であった。再び遠藤のもとに呼ばれた山崎は、既出の『新しい学校建築』の中で次のように述懐している。

「教育建築へ死をかけた人、故遠藤新。日本の正しい教育建築に尽くすこと三十余年。六三制以前は官僚の圧迫のもとに苦勞と忍耐を重ねながらも、少しもその主張を曲げずじりじりとその実現に努力し来つた(ママ)人である。」

そして、3つの中学校の計画を中止するようにと訴える医師や近親者に対して、『教育建築の為には鉛筆を持たなければ私は死ぬ。お前たちは私を殺すのか』と云って、その忠告を少しもきかなかつた。」

将来を担う子どもたちを育てる大切な環境である学校建築の重要性を訴え続け、環境としての建築を考え創作し続けた建築家・遠藤新の最後のメッセージである



若柳中学校 昇降口

→写真・図面・解説文／井上 祐一 氏

→No.1 建築のはじまり

→No.2 震災直後の建築

→No.3 大正から昭和へ

→No.4 煉瓦に聴く

→No.5 建築家の使命

ライブラリーのTOPへ

Copyright(C)2006 YODOKO.All Rights Reserved.